

## 松永健哉と紙芝居『人生案内』

浅岡 靖央

### はじめに

紙芝居といえば、保育所や幼稚園など幼児保育の現場で、幼い子どもたちを観客にして保育者によって演じられる様子が、現代ではもっとも一般的なイメージであろう。また、公共図書館の子ども向けスペースにおいて、ボランティアの方たちが子どもたちに紙芝居を演じてみせるという風景も珍しくはない。今日においても、そのようにたいいていの人が子ども時代に接するということによって、結果的に紙芝居は、世代を超えて広く一定のイメージを共有できる文化財となっている。

紙芝居は「脚本に従って描かれた連続的な画面を、演じ手が次々とぬきながら演じ、演劇的な空間をもたらす日本独得の文化財」<sup>1</sup>と定義されるが、そうした紙芝居が日本で生まれたのは1930年代である。ただし、その頃の紙芝居をとりまく風景は、今日のそれとは大いに様子が異なる。当時の資料から、それを垣間見てみよう。

カチカチと云ふ拍子木の音が、春の陽をついて響き渡ると、無心に遊んで居た子供達が云ひ合せたやうに拍子木の音のする方へ駆け出して行く、方々の家からは、子供等があわてふためいて戸も閉めないで走つて行く。小僧さんは主人の用も忘れて立止まる、山高帽の中年の親爺さんが真面目になつて動かない。子守女は、背中の赤坊の泣くのもものかわ一目散だ、長屋のお神さんさへ手を拭き拭き出て来る。何時もの紙芝居が来たのだ。この人気、この魅力……紙芝居の持つ大きな力が感じられる。<sup>2</sup>

(表記の一部を現行のものに改めた。)

つまり、紙芝居は街頭で演じられる新しい娯楽として人々の前に姿を現したのであった。子どもたちは、お小遣いを握りしめて紙芝居屋さんのもとに駆け寄り、飴や煎餅を買い求めて、それを口に頬ばりながら、おじさんの演じる紙芝居に見入ったのである。そしてその周辺には、「小僧さん」・「親爺さん」・「子守女」・「お神さん」など、若者や大人の姿さえあったということである。

しかし、多くの人の心をとらえたその圧倒的な人気は、やがてあらゆる場面で人々を教化・教育する強力なメディアへの変貌を紙芝居にもたらした。その過程に大きな役割を果たした人物の一人が、本稿で取りあげる松永健哉である。松永は、1938（昭和13）年に日本教育紙芝居協会を創立したことによって、街頭で演じられる娯楽としての紙芝居とは区別される、いわゆる「教育紙芝居」の確立に大きな役割を果たした人物である。

本稿では、その「教育紙芝居」確立の端緒となった紙芝居作品『人生案内』が、どのような経過によって成立したのかを、可能な限り明らかにしていきたいと思う<sup>3</sup>。

## 1. セツルメントと非合法活動

松永健哉は、1930（昭和5）年4月に東京帝国大学文学部教育学科に入学している<sup>4</sup>。この年は、街頭における紙芝居興行（街頭紙芝居）において画期的な出来事が起こった年として記録されている。それは、紙製の人形を操って演じられる紙芝居から、一枚絵の連続で演じられる紙芝居（現在「紙芝居」とされている形式）への転換である。一般的に、立絵紙芝居から平絵紙芝居への変化と意義づけられている。そして同年暮れに、平絵紙芝居の第3作として『黄金バット』が誕生したことが、その後の街頭紙芝居隆盛の端緒となった<sup>5</sup>。

街頭紙芝居は、貸元と呼ばれる業者が専属の作家・画家に肉筆手描き作品を製作させ、その貸元に属する複数の紙芝居屋が毎日賃料を払って作品を借り、飴などを売りながら方々で上演するという営業形態であった。平絵紙芝居の大きさは、当初四六判（B6判大）であったが、その後その倍の四六倍判（B5判大）になり<sup>6</sup>、やがて今日の標準的な紙芝居と同じ四六四倍判（B4判大）になった。

『黄金バット』を生み出した紙芝居の貸元「蟻友会」は、下谷区入谷（現在の台東区入谷）に所在していたが<sup>7</sup>、隅田川を隔てた本所区横川橋（現在の墨田区横川）には、1923（大正12）年9月1日に起きた関東大震災の被災者支援事業を契機にして設立された東京帝国大学セツルメントがあった。松永健哉は、東京帝国大学に入学した年の10月に、このセツルメントに設けられていた児童部のレジデント（住み込み専従者）となっている。

児童部は「子供自身を、将来のよりよい社会の担手、一員としての資格を作る為、子供の組織的訓練」<sup>8</sup>を重視して、下町の貧しい家庭の子どもたちを対象に、日常的には現代の学童保育に該当する「児童学校」（小学校3年生以上）や「お伽学校」（小学校1・2年生）を開き（それらには小学校中退者も含まれていた）、その他

にお話会、映画会、遠足、臨海学校などを催していた。

街頭紙芝居揺籃期に、紙芝居屋のおじさんたちの下に駆け寄っていた大勢の子どもたちの姿は、当時の松永の目にも入っていたに違いない。しかし松永は、この時点ではまだ紙芝居というものの蔵していた大きな可能性に気づいてはいなかった。彼の視線と行動は、1917年のロシア革命成功を経て、1922年に成立したソビエト連邦に影響を受けた、共産主義イデオロギーに向かった。プロレタリア教育運動への参加である。セツルメントに入った直後、松永はこの年（1930年）8月に設立された新興教育研究所に加入している。

新興教育研究所は合法的な研究団体として設立されたが、同時に、非合法組織として同年11月に結成された日本教育労働者組合と一体的に活動する、国際的な共産主義教育運動の日本における担い手であった。この運動は、教育史においては新興教育運動と意義づけられている<sup>9</sup>。以下、松永の手記<sup>10</sup>から、彼の活動歴を見ていこう。

翌1931（昭和6）年8月、松永は、文部省主催の講習会で新興教育研究所の機関誌『新興教育』の広告ビラを配布したことで逮捕され、四谷署に20日間拘留されている。放免後、松永はセツルメントの合法性を守るためにセツルメントを出たという。さらに同年10月に開催された新興教育研究所第2回総会が開会直後に警察によって中止された際、再び検束されて錦町署に5日間拘留されている。二度の拘留を経て、むしろ松永の思想はますます先鋭化していったようで、同年11月には非合法組織である日本共産青年同盟に加入している。しかしその直後、街頭連絡中に3度目の逮捕に遭って29日間の拘留処分となり、放免された後に再びセツルメントに入っている。

この時期の松永の思想をうかがわせる資料として、彼が「延山潔」というペンネームで『ピオニールトクホン 第二輯』（1932年3月）に寄稿した「『太陽のない街』のピオニール」がある。ピオニールとは、ソビエトから紹介された、労農少年団とも呼ばれる少年組織で、当時日本でも各地で組織されていた。『ピオニールトクホン』は、そうしたピオニールに属している子どもたちに向けて、階級意識を教化するために作成されたテキストである。

「『太陽のない街』のピオニール」は、日本共産青年同盟に属する青年たちが、「太陽のない街」と呼ばれる日当たりの悪い街に住む貧しい労働者の子どもたちを対象に、政府に対する抗議を呼びかけてピオニールを組織するという内容で、文中には「『日本××青年同盟万才!』」<sup>11</sup>という言葉も見られる（「××」は伏字で、明らかに「共産」）。

松永の非合法活動は続いた。再び手記によれば、1932（昭和7）年5月に再びセ

ツルメントを出た松永は、9月に4度目の逮捕に遭っている。富坂署に40日余り留置された後、本富士署に回されて書類送検され、検事局に3回出頭して転向手記を書かされたことでようやく起訴猶予となり放免された。

非合法活動に明け暮れたこの時期の松永にとっては、巷で子どもたちが夢中になっていた街頭紙芝居の喧噪は、まったくその視野の外にあったと言ってよいだろう。しかし、同じ頃、セツルメントにごく近い場所には、その喧噪に着想を得て、まったく新しい使命と形式を紙芝居に与えた一人の女性が、静かにその活動を開始していた。福音紙芝居の創始者、今井よねである。

## 2. 今井よねの福音紙芝居

今井よねは、関東大震災の後、富山県立滑川高等女学校の教員を辞して上京し、東京帝国大学セツルメントと同じ本所区に設けられた本所基督教産業青年会を拠点に、賀川豊彦の下で被災者の救援活動に従事するようになった<sup>12</sup>。その後、1928（昭和3）年にアメリカに留学し、帰国後の1932（昭和7）年、本所区林町（現在の墨田区立川町）で日曜学校を開いた。

前述したように、街頭紙芝居が平絵の形式となって子どもたちの人気を獲得し始めたのは1930年であり、今井にとってそれは留学中の出来事であった。しかし、帰国した1932年は、まさに街頭紙芝居大流行の最中である。街頭紙芝居に心を奪われ、日曜学校に来なくなった子どもたちに直面した今井は、子どもとともに街頭紙芝居を見にいった。そこで紙芝居の魅力に開眼し、それをキリスト教伝道に活用するという着想を得たのであった。今井の著書『紙芝居の実際』には、次のように記されている。

私は日曜学校のかはりに、子供と一緒に紙芝居を見乍ら、私もし様、聖書物語には、信仰偉人のものがたりにはこれより面白い材料がいくらかもある。教会でもやらうと決心して準備を始めたのでした。<sup>13</sup>

その後の今井よねの紙芝居に関わる精力的な活動については、すでに上地ちづ子によってその大要が明らかになっている<sup>14</sup>。それによれば、今井が世に送り出した福音紙芝居作品は、肉筆手描き画の紙芝居、日本日曜学校協会が刊行した紙芝居、紙芝居刊行会の紙芝居の3種類に大別できる。

今井が最初に手がけたのは、街頭紙芝居の形式を真似た、肉筆手描きによる作品である。街頭紙芝居画家に絵を描いてもらって『ダビデ伝』4巻（100画面）を製

作り、日曜学校で演じたという。これが好評を得たことから、その後次々と新しい作品が作られ、1933（昭和8）年8月には、街頭紙芝居の営業形態を取り入れて、この手描き作品を使用する「福音紙芝居貸元の経営」<sup>15</sup>を掲げた「紙芝居伝道団」を設立している。作品はまったく現存していないが、遺された写真<sup>16</sup>からは、四六4倍判（B4判大）であったと推定される。

日本日曜学校協会では、1933年1月に紙芝居を伝道に利用する決議が行われ、同年中に計5巻の紙芝居を発行したとされる。そのうちの『浪よ静まれ』と『イエスさま降誕物語第二編』の2巻が、今井よねによる脚本である。といっても、現存するものを見る限り<sup>17</sup>、脚本は絵の裏には印刷されておらず、別紙に印刷されていたと推測されている。大きさは四六倍判（B5判大）で、絵は線画で描かれており、購入者が色を塗るといった塗り絵式のものである。

今井自身が設立した紙芝居刊行会は、四六4倍判（B4判大）、表面の絵は色刷りで裏面に脚本が印刷されているという、今日の紙芝居作品と変わらない大きさ・形態のものを精力的に発行していった。これが「B4版大<sup>マ</sup>の印刷紙芝居としては、おそらく最初のもの」<sup>18</sup>とされており、現在までに計49作品の刊行が確認されている<sup>19</sup>。

### 3. 児童問題研究会

1933（昭和8）年4月、3度目にセツルメントに戻った松永は、セツルメント児童部内に児童問題研究会を組織した。同年7月、機関誌として発行した『児童問題研究』創刊号に掲載された「児童問題研究会研究コース」では、研究範囲として示された「第一部児童芸術研究部」に、童話・美術・唱歌・児童劇に続いて、「紙芝居、人形芝居、影絵芝居」と記されている。その上、そのうち紙芝居に関する「問題の取り上げ方」として、「日本及世界に於ける紙芝居の起りと現状」、「紙芝居の芸術的教育的価値について」、「紙芝居の作り方やり方」と列記されている<sup>20</sup>。また、この創刊号には、雑誌や新聞記事を紹介する「校外教育資料」という頁が見られるが、そこにも「効果100%の紙芝居」、「紙芝居の改善」といった記事が含まれている<sup>21</sup>。

このように、児童問題研究会はその発足当初から、紙芝居に強い関心を抱いていたと言えよう。その背景として、街頭紙芝居の流行があることは間違いない。そして、一方ではその内容の卑俗性と子どもたちに提供される飴などの非衛生性を非難する世論が高まるとともに<sup>22</sup>、他方でその教育的活用を模索する動きもすでに始まっていた。セツルメントを母体とし、児童の校外生活に強い関心を寄せ、校外教育の重要性を主張するこの研究会にとって、街頭で子どもたちをひきつけてやまな

い紙芝居に対して関心を抱くことは自然ななりゆきと言ってよい<sup>23</sup>。

ただし、ここまでに見られた関心は、いわばまだ傍観者のなそれに過ぎないものであるが、続く第1巻第3号（1933年9月）では、突如として紙芝居の実践者としてのふるまいがうかがえることになる。同号に掲載されている「夏季聚落便り」という記事は、この年8月1日から14日にかけて千葉県で実施された「帝大セツルメント臨海学校」の報告だが、その中に次の記述が見られる。

催物として人気を博したのは、生徒の黒んぼダンス、紙芝居（人生案内）、劇（たゝされ坊主と少年防護園員）であつた<sup>24</sup>

さらに同号の「編輯後記」には、「会員、読者諸君が子供の集りをもつとき、童話、劇、紙芝居等の実演のため技術者を必要とするときには一報下されば、第2部研究部有志がいつでも応援にでかけていきます」<sup>25</sup>とある。つまり、この年8月の時点で、『人生案内』という紙芝居がすでに製作されており、児童問題研究会には、この時点ですでに自ら紙芝居の実演を行う技量を有していた人物がいたということになる<sup>26</sup>。

#### 4. 松永健哉と福音紙芝居の出会い

松永を中心とする児童問題研究会は、子どもたちの校外生活において見のがせないものとして紙芝居を視野に入れていた段階から、自分たちの手で紙芝居を製作し実演するという積極的行動へと移っていったわけであるが、その経緯についてもう少し詳しく追いかけておきたい。

それについて、貴重な証言を遺しているのは、やはり松永健哉である。後に松永自身が組織した日本教育紙芝居協会の機関紙『紙芝居』第5巻第1号に掲載された松永執筆の「紙芝居自叙伝（1）」を見てみよう。

今井さん（今井よね：筆者）その人には、極く最近までお目にかかる機会はなかつたが、実は氏が、私の紙芝居眼を開いてくれた恩人であつた。今井氏作の紙芝居の普及に当つてゐる一人の青年が、わざわざ私達の所にやつて来て、実演してくれた。（中略）その実演によつて私はびつくりした。それは、紙芝居なるものを初めてゆつくり実見したといふことによつて、私の内部にモヤモヤと探しあぐんでゐたものが、びつたり焦点を得たのであつたろう。しかし、もう一つ、今でも私の心に強く印象づけられてゐるのは、その恩人の青年の誠

実さであつた。(中略)彼の初心な態度と謙虚さは、私に、紙芝居そのものを作品の価値以上に評価させ、又たやすく受け入れさせた大きな力であつたことを認めずにゐられない。<sup>27</sup>

今井よねの日曜学校と松永の活動拠点であつたセツルメントとは、同じ本所区内にあり、しかも、それぞれが子どもに関わる活動を行っているという共通点も持っている。その意味では、今井の製作した紙芝居の普及に尽力していた青年にとって、セツルメントの敷居はそれほど高くないものであつたと想像できる。ともあれ、このように、その青年の実演した紙芝居が、松永の心に強く焦点化されたわけである<sup>28</sup>。

続けて松永の回想を見ていこう。

私は早速、バイブル紙芝居二巻を求め、即日から熱心な実践者となつた。型は今の標準型とその半分位の大きさのとあり、又、着色したのと塗絵式のとあつた。

しかし、さうなるといよいよ、キリスト教徒でもない私が、自分の気に入る紙芝居をつくつてみたくなつたのは自然のことだつたらう。

その最初の野心作は、昭和六年の末、或るさし迫つた必要から私の仲間達との共同作品として、そして私はむしろ手伝ひの立場にあつて物されたのである。これが「人生案内」であるが、それは恐らくいはゆる教育紙芝居の最初のものの一つだつたらうし、又、今日においても、その製作技術は相当高度のものをもつてゐる。この二十枚一巻の製作から実演の中に、教育紙芝居の過去と現在と未来がよく現はれ、示唆されてゐると思ふ(後略)<sup>29</sup>

まずここで注目したいことは、松永が青年から購入した「バイブル紙芝居」が2種類であつたという点である。「型は今の標準型とその半分位の大きさの」で「着色したのと塗絵式の」とある。「今の標準型」というのは四六4倍判(B4判大)をいう。つまりこの2種類の紙芝居作品は、前述した今井よねの関わつた2種類の紙芝居作品、紙芝居刊行会のものと日本日曜学校協会のものに、それぞれ見事に対応していることになる。

日本日曜学校協会が発行した紙芝居の刊行年は1933(昭和8)年とされているが<sup>30</sup>、現存している作品には奥付がなく、月日は不明である。一方、紙芝居刊行会が最初に出版した聖書物語第1巻『少年ダビデ』は同じ1933(昭和8)年7月8日発行であり、続く第2巻『善きサマリア人』は同年8月30日発行となっている<sup>31</sup>。

ということは、ここで松永は、『人生案内』は「昭和六年の末、或るさし迫つた必要から私の仲間達との共同作品として」製作されたとしているわけだが、「昭和六年」は明らかな間違い（松永の記憶違いか誤植）ということになる。正しくは、すでに今井よねの紙芝居作品が世に出ている昭和8年であろう。児童問題研究会は昭和9年の新春に「新春特別児童問題講習会・子供生活展覧会」を開催しており、そこで紙芝居『人生案内』が実演されたという記録がある。松永のいう年末の「さし迫つた必要」はその準備と考えられる。

## 5. 紙芝居『人生案内』の公開

1934（昭和9）年1月5日から7日、児童問題研究会が主催する「新春特別児童問題講習会・子供生活展覧会」が、東京・神田駿河台の文化学院を会場にして開催された。この講習会で紙芝居『人生案内』は初めて一般に公開された。

松永によれば、脚本を担当したのは児童問題研究会の「間瀬君と木村君」、絵は「専門家の友人」に依頼した手描きで、大きさは標準型（B4判大）、ただし脚本は絵の裏面ではなく別紙に記されており、「台詞を一方で読み上げ、他の一人が絵をめくる」という方法での実演であったという<sup>32</sup>。

その後、松永らは、この紙芝居の絵から輪郭だけを写し取って線画とし、藁半紙に謄写版印刷したものを、『児童問題研究』第2巻第1号（1934年1月）の付録として広く配布した。付録といっても、綴じ込みではなく、同号 p.83 に印刷された「子供新聞紙芝居引換券」を切り取り、切手を付して郵送で申し込むという手順を必要としたが、同誌次号（第2巻第2号）の読者欄「読者カラ」には、引換券と切手を同封したという各地の読者からの便りが多数掲載されており、反響の大きかったことがわかる。

この紙芝居『人生案内』は、映画『人生案内』を原作として製作されている。これは、1931（昭和6）年に製作された、当時のソビエトで初めてのトーキー映画で、日本では翌1932（昭和7）年に公開されている。ロシア革命後の混乱した社会の中で、浮浪児から非行少年になった主人公が、仲間とともに指導者に導かれ、集団的な生産労働を通して更生していくという物語である。製作翌年の第1回ヴェネチア国際映画祭で監督賞を受賞し、日本でも当時文部省推薦となり、今日でも「児童を描いた映画として不朽の価値あるもの」<sup>33</sup>と評価されている。

## 6. 紙芝居『人生案内』の謎

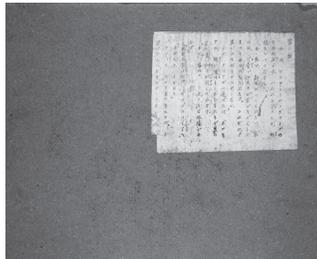
ここまで、『人生案内』という紙芝居作品が生まれる経緯を追ってきた。松永健哉自身が「最初の教育紙芝居——教育紙芝居の第一輯」<sup>34</sup>と称しているように、紙芝居史においては見のがすことのできない意義深い作品であることは間違いない。

児童問題研究会が製作し、1934年1月に公開された手描き・標準型の『人生案内』は、その後松永個人の手に渡り、戦後のある時期まで松永のさまざまな活動場面に生かされたとされているが<sup>35</sup>、最終的には松永自身によって廃棄されている<sup>36</sup>。

一方、『児童問題研究』付録の『人生案内』は、当時、松永と新興教育運動をともにした戸塚廉（1907-2007）が長く所蔵しており、1986（昭和61）年になって、戸塚自身の発行していた月刊『おやこ新聞』第758号から第760号（おやこ新聞社、1986年2月～4月）に紹介されたことで、およそ半世紀ぶりに初めてその存在が確認された<sup>37</sup>。現物は全23枚で、絵は線画に彩色された上で厚紙に貼り付けられており、その裏面には小さな紙片に謄写版印刷された脚本がやはり貼り付けられている。これが、今日において紙芝居『人生案内』の存在を確認できる唯一のものである。



1の表



1の裏



2の表

しかし、紙芝居『人生案内』については、いくつかの謎がまだ残されている。松永健哉は当時も、そしてその後晩年に至るまで、紙芝居『人生案内』は1934（昭和9）年1月の「新春特別児童問題講習会・子供生活展覧会」での実演をめざして製作したとしている。実際、その製作過程をうかがわせる、児童芸術研究部「紙芝居の作り方やり方」という記事も『児童問題研究』第2巻第1号に掲載されている。そこでは、脚本をどのように絵にするのか、さらに実演に際して説明（台詞）にどのように抑揚とテンポをつけていくかが、『人生案内』を例にして示されており、文末には「1933・12・12」<sup>38</sup>と記載されている。

とはいえ、前述したように、1933（昭和8）年9月に発行された『児童問題研究』第1巻第3号には、セツルメントの臨海学校で「紙芝居（人生案内）」が人気を博

したと記載されている。これをどう解釈し、位置づければよいのであろうか。松永はこれについては一切言及していない。松永の他に、セツルメントに関わっていたメンバーの中で、いち早く映画『人生案内』の紙芝居化を試みた人物がいたということであらうか。

また、松永健哉の「紙芝居自叙伝」によれば、最初に作られた手描き・標準型の『人生案内』は、先の引用にもあるように全20枚となっているが、それをもとにして製作された、現存する『児童問題研究』付録の『人生案内』は全23枚である。なお、後に松永が自宅に設けた児童校外教育研究所から頒布された『人生案内』は、その広告によると全30枚<sup>39</sup>、そして戦後になって松永自身が復刻した『人生案内』は全22枚<sup>40</sup>となっている。『人生案内』はいまだその全貌を明らかにしてくれてはいない。

## おわりに

松永健哉は、1934（昭和9）年3月に大学を卒業すると同時に小学校教員となった。紙芝居『人生案内』も、彼とともに、校外教育の現場に加えて、小学校教育の現場へとその活躍の舞台を広げていった。松永は、学校の内外で、そしてやがて子どもだけでなく大人をも対象にする紙芝居へと、その可能性を広げていくことになる。その内実、すなわち彼の行動と思想の軌跡について明らかにすることを今後の課題としたい。

## 注

- 1 上地ちづ子「紙芝居」大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典 第2巻』大日本図書、1993年、p.345。
- 2 東京市社会局『紙芝居に関する調査』東京市社会局、1935年、p.1。
- 3 松永健哉の教育紙芝居に関連したこれまでの研究として、谷口雅子「昭和10年代の児童文化運動—教育紙芝居の運動を中心として—」（『福岡教育大学紀要』第36号第2分冊、1987年2月）、上地ちづ子『紙芝居の歴史』（久山社、1997年）、石山幸弘『紙芝居文化史—資料で読み解く紙芝居の歴史』（萌文書林、2008年）などはあるが、資料的な制約もあり、これまで詳細に論じられたことはなかった。
- 4 松永健哉（1907-1996）は、朝鮮（現在の韓国）で生まれて長崎県で育ち、長崎師範学校二部を卒業して同県内で小学校訓導を短期間勤めた後、1927（昭和

- 2) 年に高知高等学校に入学し、同校を卒業した1930(昭和5)年に東京帝国大学に入学した。
- 5 前掲3、石山幸弘『紙芝居文化史』、pp.45-46。
  - 6 永松健夫『『黄金バット』のころ』『紙芝居』第8巻第1号、日本紙芝居協会、1947年12月、p.12。
  - 7 相馬泰三「紙芝居発達史—紙芝居の発生(2)—」『紙芝居』第7巻第12号、日本紙芝居協会、1946年12月、p.6。
  - 8 『東京帝国大学セツルメント十二年史』東京帝国大学セツルメント、1937年(久山社より「日本〈子どもの歴史〉叢書29」として復刻、1998年)、p.84。
  - 9 柿沼肇『新興教育運動の研究—1930年代のプロレタリア教育運動』ミネルヴァ書房、1981年、参照。
  - 10 松永健哉「私の昭和底辺教育史(1)」故上地ちづ子旧蔵。現在は筆者所蔵。手書きによる400字詰め原稿用紙400枚余りの原稿コピーで、末尾に「昭和48年11月」と記載されている。
  - 11 『ピオニールトクホン 第二輯』新興教育研究所出版部、1932年3月(新興教育複製版刊行委員会より復刻、1967年)、p.28。
  - 12 今井よね(1897-1968)は、三重県で生まれ、1917(大正6)年に三重女子師範学校を卒業して東京女子高等師範学校に入学。1921(大正10)年に同校を卒業後、富山県立滑川高等女学校で教職に就いた。
  - 13 今井よね『紙芝居の実際』基督教出版社、1934年、p.108。
  - 14 今井よねの紙芝居活動については、上地ちづ子による「今井よねと福音紙芝居」(『児童文学研究』第20号、日本児童文学学会、1988年12月)ならびに「今井よねの出版紙芝居と紙芝居観」(日本児童文学学会・富田博之・上笙一郎編『日本のキリスト教児童文学』国土社、1995年)に詳しい。なお、すみだ郷土文化資料館が開催した企画展「教育紙芝居の誕生」(2015年10月~12月)は、上地論文及び上地の遺した調査資料に基づいて、今井よねの紙芝居活動全般を詳細に明らかにした。ここでの記述も、その展示ならびにその展示図録『教育紙芝居の誕生』(すみだ郷土文化資料館、2015年10月)に多くを負っている。
  - 15 前掲13、p.166。
  - 16 前掲14、『教育紙芝居の誕生』、p.5。
  - 17 『浪よ静まれ』及び『イエスさま降誕物語第二編』は、ともに大阪府立中央図書館国際児童文学館所蔵。
  - 18 前掲14、上地ちづ子「今井よねと福音紙芝居」、p.95。

- 19 前掲 14、『教育紙芝居の誕生』、p.24。
- 20 『児童問題研究』第1巻第1号、東京帝国大学セツルメント、1933年7月（白石書店より復刻、1977年）、p.86。
- 21 同前、pp.62-63。
- 22 『東京帝国大学セツルメント十二年史』（前掲8）にも、昭和7年度の記録として「街頭における怪しげな紙芝居の横行」と記載されている（p.82）。
- 23 石山幸弘は、街頭紙芝居（平絵）の持つ機能にもっとも早く注目し、その応用に着手したのは「階級思想に則った左翼紙芝居だったらしい」と指摘している（前掲3、『紙芝居文化史』、p.40）。ただし、今のところその紙芝居の現物や、直接その存在を確認できる資料は発見されていない。
- 24 『児童問題研究』第1巻第3号、東京帝国大学セツルメント、1933年9月、p.73。
- 25 同前、p.104。
- 26 『東京帝国大学セツルメント十二年史』（前掲8）にも、昭和8年度の記録として「児童問題研究会ができた後は、その研究員による童話紙芝居の実現がしばしばなされた。セツラーによる紙芝居（人生案内）が生まれた」とある（p.83）。
- 27 松永健哉「紙芝居自叙伝（1）」『紙芝居』第5巻第1号、日本教育紙芝居協会、1942年1月、p.17。
- 28 晩年の松永健哉は、今井よね自身が直接セツルメントにやってきたと述懐している。たとえば「今井よねさんがある日のことセツルを訪れて来たのです。キリスト伝の紙芝居を広める目的でした」（松永健哉「紙芝居『人生案内』」松永健哉監修『校外教育基本文献集 別巻』大空社、1988年9月、p.111）。しかし、「紙芝居自叙伝（1）」が今井よね存命中に書かれたものであることや、紙芝居の普及にやってきた青年に対する思い入れのある描写から、晩年の記述は記憶違いと判断した。なお、引用文中に「今井さんその人には、極く最近までお目にかかる機会はなかつた」とある。おそらく、二人の直接の出会いは、1941（昭和16）年12月23日に創立総会を開催した日本少国民文化協会の創立準備の過程であったかと思われる。同協会に設けられた紙芝居部会において、松永は幹事、今井は参事として名前を連ねている（社団法人日本少国民文化協会『昭和十七年六月 役員名簿』（エムティ出版より復刻、1991年）、pp.9-10）。
- 29 前掲 27、p.18。
- 30 前掲 13、p.127。
- 31 前掲 14、『教育紙芝居の誕生』、p.24。
- 32 松永健哉「紙芝居自叙伝（2）」『紙芝居』第5巻第2号、日本教育紙芝居協

- 会、1942年2月、pp.15-16。
- 33 佐藤忠男『映画と人間形成』評論社、1972年、p.184。
- 34 前掲32、p.15。
- 35 前掲28、松永健哉「紙芝居『人生案内』」、p.113。
- 36 上地ちづ子による、松永健哉に対するインタビュー記録「松永健哉氏にきく（1985. 4. 1、松永宅にて）」（筆者所蔵）における松永の証言による。
- 37 その後、この貴重な紙芝居作品は、1986（昭和61）年11月29日に東京大学教育学部で開かれた「紙芝居『人生案内』を観る会」（主催／民間教育史料研究会）で一般公開された後、戸塚廉から上地ちづ子に寄贈され、上地の没後に童心社が譲り受け、現在は同社資料室に所蔵されている。
- 38 『児童問題研究』第2巻第1号、東京帝国大学セツルメント、1934年1月、p.42。なお、この「紙芝居の作り方ややり方」を松永の執筆とする資料もあるが、前掲36のインタビューでは、上地の質問に答える形で、自身の執筆ではないことを明言している。
- 39 児童校外教育研究所・松永健哉「学校用 校外用 紙芝居予約募集」『生活学校』第1巻第10号、扶桑閣、1935年10月、p.47。
- 40 前掲14、『教育紙芝居の誕生』、p.19。